東京キャラバン（仮名）

① 文化事業に『物語』を

オリンピックに向けての文化事業を、と言う話を方々で聞く。
いろんな人がいろんな分野で「案」を出し始めているのだろう。
で、私が感じている危惧は、そうしたものが、すべて「単発」で終わりかねない。つまり、そうした「案」が「点」で、終わりかねない。
必要なのは、今、2020 年に向けての『物語』そして、その『物語』が 2020 年を越えても続いていけるような、そんな『物語』を作ることではないのか?
1964 年の東京オリンピックには、これで戦後が終わっていくのだ。日本がいよいよ世界に向かって復帰できるのだ、と言った、確固たる物語があったように思う。

今回の東京オリンピックには、今、日本人を動かすべき、そうした大義名分のような『物語』を簡単に見つけることは難しいだろう。
ただ、ある程度の大きさの『物語』を積み重ねることで、人々の「気運」を作ることはできる。そして、盛り上がっていった「機運」の中からしか、壮大な物語は生まれないと思う。

②そこで、『東京キャラバン』という物語

だから、とにかくまず、誰かが一つでも、物語を語り（あるいは、騙り）始めることだ。抽象論ばかり語っている場合ではない。
というわけで、私が提案する一つの物語は「東京キャラバン」である。

この物語は、2016 年のリオデジャネイロの閉会式の日に始まる。
その閉会式の時に、その時の参加国の数だけの車＝キャラバンが、出発する。
どこに向かって？東京に向かって。
そのキャラバンには、文化のあらゆる分野の（そんなに立派なものでなくてよい、つまり、音楽隊、アートギャラリー、移動劇場、移動映画館、食堂、カフェ、（古）本屋、簡易移動遊園地、大道芸人、猿回し、門付け芸的なものから、新種のストリートパフォーマンス…
この一番大切なコンテンツに当たるものを、まず、早急に決めていかなくてはいけないと思うのだが…ただ、そんなに閾を高くする必要はない）
と言ったようなものが、二百台近く（参加国の数だけ、あるいはその二倍、三倍？）これから、2020 年の開会式の東京へ向かって出発するのである。
できれば、この車すべてが、その閉会式の日に消える聖火を、いただいて、その一台一台に聖火がともり続けていれば、最高なのだけれども…オリンピックの聖火に関する規約

みたいなものがあるのだろうか。

③リオから東京へ到着したとして…

リオデジャネイロから出発した、そのキャラバンは、東京に到着後、日本、全国を巡る。まさに、それからが、いよいよこの「東京キャラバン」の活動である。
「東京キャラバン」は、すべての都道府県の都市、町、村に週末に出没しては、その小さな通りで、小さな文化フェスティバルをお届けする。お祭りがやって来る、或は、サーカス団がやって来ると思えばよい。
朝から、その町やら村のある場所があわただしくなり、何が始まるのだろうとわくわくさせる。そして、その日の昼から、ある日は翌日から、その『文化祭』が始まる。大事なのは人々を、わくわくさせることだ。つまり、「お祭り＝ハレの日」をあなたのところにお届けするのだ。そしてお祭りではあるが、それがただの出店がでるだけのお祭りではないと言う話だ。普段、およそ、聞いたことのない、クラシックの室内楽が、野外で聞ける（室内楽なのに…）あるいは、参加型のアートギャラリー（映像を使ったものも含めて）移動小劇場では、芝居、モダンダンス、人形劇など（もちろん可能であれば、伝統演劇も）いずれも、前もって、ある程度の質を審査する審議会が、お墨付きを与えたもの。（ここのさじ加減が難しい、エンターテインメント

性を重視しながら、ただ、そこに偏らないことも大事だ）移動映画館で何が上演されるか、その選択も大事だ。その選択一つで、面白くもなりつまらなくもなる。
猿回しといった古くからの門付け芸のようなものと、その対極のような、例えば、サッカーボールのリフティングパフォーマンスのようなものが同時に行われる。そのことが大事だ。
繰り返しますが、このコンテンツの充実が、最も重要なことになり、これから、様々な分野の方の力、知恵を借りることになる。場合によっては、海外のアーティストの参加も、ありではないだろうか。（海外でよくある、巨大なシャボン玉とか、長い竹馬に乗って街を練り歩くやつとか）とにかく、その思い付きはすべて、単発でよいので、知恵は出やすいのではないか？例えば、「コンドルズの盆踊りと演歌歌手を結び付けて…」とか。大事なのは、「東京キャラバン」で回ってもらうことだ。

こうしたものが、2016 年から 2020 年に向けて、最初は、各都道府県に二、三か所に週末だけ登場する。もっとも、初めから毎週、週末というのでなく、初めは、半年に一回でいいかもしれない。オリンピック前年くらいから、一か月に一回、或は、一週間に一回といった具合に、頻度が増えることで、オリンピックが近付いていることを感じさせる。

各都道府県のどこでやるかは、それぞれの都道府県との話しで、選択をするのがいい。もっとも、特定の場所に何度も行くよりは、なるべく多くの場所を回れる方がいい。
その場所で、さまざまな問題が起こるであろうから、その土地と密に連携していなくてはならず、膨大な数のボランティアが必要かもしれない。同時に、「東京キャラバン」がその土地に到着してから去っていくまでのタイムテイブルを仕切る人々も必要となる。これもなるべく、日本のお役所的な、「リラックスできるものもリラックスできなくなるような」そういう姿でなく、やれるのがよろしい。
一か所に乗り付ける「東京キャラ」バンは、車の車体を、思い思いに装飾するのがよい。ちょっと、「トラック野郎」を思い出してもらってもいい。そして、十台近く、或は、それ以上が、一斉にその場所に到着する。
当然、現地での苦情に対応する人々というのも、さっきのタイムテイブルを仕切る人々同様重要である。
こうした企画では実は、こういう部分が一番大変で、そして日が当たらない。日の目を見ない。

こうした現地での苦情を乗り越えて、むしろ偶発的に或は、やっていく中で、各地の伝統芸能やら、或は若いアーティストたちが始めた新しいものが、この「東京キャラバン」に

加わっていくことも、現実化できれば、私の夢はますます膨らむ。…というか、もはや今私はただの妄想家？

④　2020 年、東京オリンピック開会式当日
そして、それから…

そうした、あらゆる単発の思い付きがすべて「東京キャラバン」という『物語』でくくられることが大事で、それが、やがて、2020 年の東京オリンピックの開会式の当日に、その会場の周りに集結していく。その集まっていく様子は、空から映し出されることになる。そして、その東京キャラバンが、会場＝競技場の外で賑やかに、お祭りを始めるのである。そのお祭りの中心にあるものが、この日からは競技場の中、東京オリンピックである、そのことを物語る。東京キャラバンは、あれから四年間、ずっとずっと東京オリンピックを祝福し続けてきたのである。
この東京キャラバンは、決して、閾の高いものであってはならない。
そして願わくば、この東京キャラバンに参加した若いアーティストの中から、2020 年後も目覚ましい活躍をするような人が出てきてほしい（もちろん、若いアーティストだけである必要はない、名のあるアーティストも暇を見つけて参加してだきたい。わたしも、もしもこれが実現できたら、小さな芝居を持って、必ずや一年に一度、ある時期、どこか

を回りたい）
そして、この東京キャラバンが日本中にばらまいた、目の前にある文化＝ライブの面白さ。それを経験した小さな子供たちの心の中に種は撒かれる。インターネットの普及で偏りがちになった文化とは、全く違う姿、目の前で息をしている人間が生み出す文化への興味を示してくれるようになり、その中から、新たな形態の文化を生み出すとき、この「東京キャラバン」という物語は、本当に壮大な物語になるだろう。
つまり、その新たなアーティストが語るわけだ。「私の原点は、東京キャラバンでした」と。

金と時間と人と知恵の要る企画です。つまり、ほぼすべてを必要とします。

野田秀樹